

防災学習キャンプ

防災学習キャンプ運営のポイント

① シンポジウムから「今」を学ぶ

防災学習シンポジウム 総合コーディネーター
上越教育大学 大学院学校教育研究科教授 藤岡 達也 氏
防災学習シンポジスト 「学校防災教育部門」
釜石市立釜石小学校 教諭 菊池 国浩 氏
防災学習シンポジスト 「ボランティア活動部門」
新潟青陵大学 看護福祉心理学部 福祉心理学 准教授 中野 充 氏
防災学習シンポジスト 「復興支援部門」
国立那須甲子青少年自然の家 企画指導専門職 鈴木 昭博 氏



② 自然の二面性を学ぶ

自然の持つ「恵み」と「恐ろしさ」の二面性の理解を通して、「自然」と「人間」との関わりを改めて考えることができます。
例えば自然の家の立地している妙高市は豊かな自然環境を生かした農作物やスキー場、温泉などの自然の恵みを受けています。しかし、一方で火山噴火、豪雪、斜面崩壊などの大きな災害とも関連しています。
私たちはこのような恵みと災害といった自然の二面性を理解し、自然との共存を考えることは防災教育において重要な視点となります。
また、自然の二面性に触れることが地域を理解し、地域を愛することにつながると思います。

③ 避難所生活の体験を通して学ぶ

昨年の東日本大震災後、全国各地で災害に対する様々な取り組みが行われています。その中で、「避難所生活」を体験することは、いろいろな気づきが得られます。体育館の床が冷たいこと、足音が響くこと、一緒に生活している人の音が気になるなど、普段気づかないことに気づかされます。この気づきが大切です。日頃の備えや心構えとして、何を準備するか、一緒になった人とのようにコミュニケーションを図っていくかなどを考えることができます。



流れを重視したシンポジウム内容
防災教育 「釜石小学校の事例」
災害が起きたときの対処や防災マップを作成するなど、具体的な防災教育を学校にて実施しています。
災害時 「釜石小学校の事例」
釜石小学校の児童全員無事 これは防災教育の成果です。
震災後 「新潟青陵大学の事例」
復興支援ボランティア活動を実践し、延べ10回380名の学生や教職員が参加しています。

復興に向けて 「那須甲子青少年自然の家の事例」
福島を未来を築いていく子どもたちに夢と希望を持って、力強く歩んでいってもらうために、様々な体験を通して、福島復興の方策を検討し、その成果を那須甲子から世界に向けて発信しています。
防災教育の重要性を再確認し、復興に向け様々な方が協働して、今を一生懸命に生きていることがわかりました。



④ 新潟青陵大学の学生の力 (以下学生)

60名の学生が自ら手を上げて、この学習キャンプに参加してくれました。
東日本大震災後、学生の有志による「災害ボランティア学生本部」が結成され、計10回にわたる現地へのボランティア活動が実践されました。その中で、汗をかき、親身になって被災された方と協働するなど貴重な経験をしています。このような経験は、社会の一員として共に生きる喜びを目的に感じたいことと思います。
このような取り組みを経た学生が、是非「高度でもできることを」をスローガンに参加してくれました。一緒に参加している家族に対して、きめ細かい配慮やサポートをしていただきました。また、炊き出しや避難所運営に力を注いできました。



防災学習キャンプを通して見えたこと 今私たちができること

参加者一人ひとりが「今私は何ができるだろうか」ということを改めて考える学習キャンプになりました。小さなことや身近なところから、できることをしていこうという意識に変わっていったと思います。それは学習キャンプのまとめで、参加者全員がメッセージカードを作成しました。小学生1年生から70代の方まで様々な方が、自分のできることを書き出し、書き出しました。書くという作業は自分の思いを整理し、再認識することができる

です。さらに一歩踏み出す原動力となります。
このような学習キャンプを通して、まずは、「気づく」。自分のできることを再認識する。そして、一歩踏み出す。この力を身につけることができたと思います。

